

～すぎなみコミュニティカレッジ～

- 実践に学ぶ！ - 指導者と共に青少年スポーツの未来像を考えよう

主催：杉並区教育委員会

企画・運営：NPO法人 スクール・アドバイス・ネットワーク

協力：杉並区学校教育コーディネーター

報告者：NPO法人 生涯学習 知の市庭

パネル・ディスカッション

パネリスト

- ・長谷川 貢一氏〔杉並区立阿佐ヶ谷中学校校長〕
 - ・井村 浩明氏〔杉並区学校教育コーディネーター〕
 - ・後藤 禎和氏〔NPO法人早稲田クラブ〕
- ファシリテーター：田中 豊氏（渋谷区教育委員会）

田中氏

まず最初に、本日の講座の進め方についてご案内をさせていただき、その後、パネラーの皆さんとご一緒にディスカッションを行いたいと思います。今日のテーマは「地域が支える青少年スポーツの現状と未来像」となっておりますが、その中で、私は2点ばかり議論のポイントとなるであろう内容を提示させていただきたいと思います。

一口に青少年スポーツと言いましても、その意味する範囲は広いのですが、本日は、主に小中学生を中心とした地域のスポーツクラブですとか、地域の参画支援によって進められています学校の部活動に関わる問題について話したいと思います。

2点目として、少年スポーツを支える環境整備に焦点を合わせたいと考えています。

特に、後半は、今日ここに参加された皆さんにも議論の輪に加わっていただき、全員で進めていきたいと考えていますので、よろしく願いいたします。前半は、パネラーの方々から、日常青少年スポーツに関わる中でお感じになっていることとお話しいただこうと思います。そして、明日の活動が1歩でも2歩でも前に進められるような機会となれば幸いです。

では、さっそく、パネラーの皆さんの活動内容のご意見を伺いたいと思います。

最初は井村さんからお願いします。井村さんは、中学校の部活動の指導員としてバスケットボールの指導を行っておられます。また、杉並区の学校教育コーディネーターとして、多様な面からサポート活動をなされております。

井村氏

本日は知った顔も多いので、気楽にざっくばらんにお話しさせていただきた

いと思います。現在、私は、小学校・中学校ともに、さまざまな形でスポーツ指導に関わらせていただいております。ご存知ない方もおられると思いますが、学校教育コーディネーターと言いますのは、杉並区独自のシステムで、発足してまだ2年目です。地域や学校に応じて、学校が欲しい人材を紹介したり、あるいは地域の側から、学校に貢献したい方と学校との橋渡しをしています。

私たちの活動は、子どもたちによりよい体験や経験の場を与えていくことが目的で、総合的な学習の時間に寄与する人材をコーディネートする活動も行っています。

当然、さまざまなスポーツ関連の内容も絡みます。たとえば小学校ですと、週に1回、学校での部活動、クラブ活動の支援があります。学校の先生だけでは手が回りきらないので、どなたか地域の方で支援して下さる方がおられないでしょうか、そういった話が持ち上がってくるのが現状です。また、中学校におきましても、クラブを指導されていた先生が人事異動で他の学校に移られますと、そのクラブが廃部になることもあります。そこで、地域の指導員に協力いただいで存続させていこうという動きもあります。

私は、ここでは小学校に関わる問題についてお話をします。

現在ミニバスケットボールの指導をしておりますが、このスポーツは、お父さん、お母さん方の協力がないと成り立ちません。しかし、熱心に協力して下さる保護者の方が、お子さんが小学校を卒業されると同時に活動から離れられてしまうケースが多くみられます。こういったことが続きますと、運営がうまくゆきません。

ここで、うまく環境づくりを進めている例をご紹介します。

その小学校のミニバスケットボール部は、男女生徒併せて30名くらいの規模です。子どもたちだけでなく、お父さんのパパさんチームもあります。メンバーは15名くらいです。ママさんチームもあります。さらに、卒業して中学生になった元部員の子ども、高校生になった子どもたちもやってきます。週1回、平日の夕方、午後6時30分から9時まで、こういった人たちが一緒になって練習をしています。

年齢的には、小学生から、パパさんでは年齢的に50歳代の方もおられます。多いときで60名、70名も集まります。もちろん、小学生は小学生同士、お父さんはお父さん同士でプレーしますが、ときには、中学委や高校生とお父さんたちがムキになってプレーすることもあります。

このように、バスケットボールを通じて共感できる場といいますか、クラブチームができています。ここの活動を見ていて、私がいいなあと感じるのは、親御さんたちが小学生を応援するだけでなく、たとえば、お父さんがシュートを外すと、子どもが「ヘタクソ！」と文句をいったりします。子どもが一生懸命になる姿を親が見るだけでなく、大人の頑張る姿を子どもに見せることも大切ですね。子どもの成長を素直にほめてあげると同時に、大人も一緒になって楽しく過ごすことが大切だと思います。

運営面でも、親御さんたちから会費のようなものを集めて、子どもの保険ですとか、試合に行くときの交通費などに利用しています。また、試合の会場が遠距離の場合には、電車を乗り継いで行くのは大変ですから、お父さんやお母さんがマイカーに乗せて連れてゆき、応援するといったこともあります。あるいは、卒業した中学生の試合の応援に出かけることもあります。中学生のプレーを見せることで、「私も早く、あんなプレーができるようになりたい」といった、よい刺激になるからです。

子どもたちがスポーツを続けてゆくためには、お父さんやお母さん、地域のさまざまな方々の支援が欠かせません。幅広く、みんなで共にやってゆこうという形の活動を展開してゆきたい、また、そうなるように少しでもお手伝いをしたいという気持ちで活動しています。それぞれの子どもたちの成長段階で、多くのものを習得して、将来も通じてスポーツを続けてゆけるような土台づくり、また、その土台をつくるための環境づくりを、今後も続けてゆきたいと思います。

後藤氏

早稲田クラブとして活動していく上で、私自身が感じている課題などについてお話をさせていただきます。

まず最初に、早稲田クラブとはどんな組織であるかをご紹介します。簡単に言いますと、早稲田大学が有する資源 グラウンドなどの設備、OBを通じた人材およびネットワーク、各運動部が培ってきたスポーツに関わるノウハウ等 こうした資源を地域に開放していくことを主旨に活動しているスポーツクラブです。

具体的な活動は、現在三つあります。一つは少年少女に対するスポーツの指導と普及活動、二つ目は、成人を対象とした啓蒙的な活動、三つ目はすべてを総合した形での、サポーターズクラブと称しておりますが、いわゆるスポーツのファンクラブ的な組織の運営です。

今日のテーマに深く関わるのは、最初に申しあげました少年少女を対象とした活動になります。具体的には、各種スポーツのスクールを運営していくこと。二つ目としては、近隣の小中学校に出張してのスポーツ指導です。その中で、早稲田クラブでなければできないオリジナルな活動として考えていますのは、早稲田クラブにはラグビー、サッカー、アメリカンフットボール、ボートの四つの部が参加しています。来年の4月からは、さらに二つ三つの部が増える予定ですが、各部（ディビジョンと呼んでいます）が横のつながりを持つことで、種目間交流ができるのではないかということです。たとえば、真夏の暑い盛りにラグビーの練習を行うのは、特に子どもにはハード過ぎますね。そういったときに、戸田で活動しているボード部へ行って、ラグビーの練習ではなくボードをこぐトレーニングに切り替えるといったことなどが考えられます。逆にボードの方は、真冬は寒くて練習になりません。そういったときには、ラグビー・ディビジョンがラグビーの指導をしたり、サッカーを行ったりという

形で、さまざまな種目を体験する機会を得ることが可能になります。ひとつの種目にこだわらず、さまざまな種目を体験することで、自分に一番適したスポーツを選択する可能性が広がってゆきます。

2番目としてレベルに合った対応があります。プロを目指す子どももいれば、趣味として、楽しみとしてスポーツを続けたいという子どももいるでしょう。そういった多様なニーズに合った場の提供が早稲田クラブの理念のひとつです。できるだけ広いカテゴリーの中で、さまざまな子どもたちのニーズに合った対応をしてゆきたいと考えています。そういった取り組みが、これまで日本になかった新しいスポーツの進展に寄与するのではないかと思います。

こういった活動をする中で、私が感じていることは多々あります。例えば、現在日本では、スポーツを指導する人材の育成プログラムがきちんと提起されていないということ。この点でしっかりしているのはサッカーだけでしょう。そういった面でも、民間で活躍するスポーツ指導員に対してきちんとした育成プログラムなどを提案してゆきたいと考えています。これが解決されたとして、次に問題になるのは、派遣した指導員の報酬のことです。たとえば小中学校に早稲田クラブの指導員を派遣したとして、現在学校（行政）から支払われる金額では、うまく回っていかないと思われれます。そうしますと、学校や行政からだけでなく、指導を受ける親御さんたちなど、さまざまな方たちに協力を求める必要があります。

長谷川氏

いま、後藤さんは表題に沿った夢のあるお話をされました。大きく言いますと、早稲田クラブの活動次第で、日本のスポーツ環境が大きく変わってくるのではないかという思いを強くしました。いままで、こういった形でスポーツを支援している組織は、日本にはありませんでした。

さて、ここから、夢に対する現実の話、現状について述べます。私は、杉並区では七つの学校で教育に携わってまいりました。スタートは私立の高等学校で、そこに7年間勤めました。その後東京都の教員になり、小学、中学を体験しましたので、公立の小中学校と中学校、私立の高校で教育体験をしたこととなります。

ところで、以前、週に1回か2回、スポーツ・文化を問わず、すべての生徒がクラブ活動を行うように義務づけられていましたが、2年ほど前から、これがなくなりました。同時に、私たち教員にも指導の義務がなくなりました。校長としては、実にやりづらくなったわけです。

今までは縛りがあったおかげでクラブを存続させることができましたが、現在は、クラブの存続は指導者次第となっています。保護者の方から、よく「クラブをつぶさないで下さい」、とお願いされます。しかし、指導者がいないと存続は難しく、現在はボランティアの方々の方々の協力を得て、なんとか首をつないでいるのが現状です。

本来でしたら、同じ学校の中で、教師が生徒のスポーツ指導を行うというのが

普通の在り方だと思います。なぜなら、そういったことが、実は日常の授業や進路指導にも大きく関わっていくと思うのです。指導者として立派であればあるほど、生徒たちは先生を尊敬するからです。といった話は、ちょっと横に置いておきますが、子どもたちの人間形成において、自分が好きな部活動ができることは大きな意義があると考えています。

現在、私は中学校の体育連盟の会長をやらせていただいております関係で、いくつかの大会を見に出かけます。中学校のスポーツには、春、夏、秋と、年に三つの大きな大会があります。そして、大会は（東京都の場合）、東京都大会、関東大会、そして全国大会とありますが、杉並区では公立中学校のバスケットボール部が全国制覇を果たしたことがあります。また、野球では日大二中が全国制覇をしていますね。このような成果が出ることから見ても、杉並区は結構スポーツクラブの活動が盛んに行われていると思います。

ただ、私が懸念していますのは、区が一般のスポーツをどういうふうを考えているかを明確にしないと、スポーツのすそ野が広がっていかないのではないかとことです。また、こういった指導者を育成していくか、といったことが問われていると思います。

「なぜスポーツをするのか」という素朴な原点に戻ったときに、スポーツ指導者になりたい、よいチームをつくりたい、よい選手を育てたいといった夢が実現できるような環境づくりが必要だと思います。さきほどの早稲田クラブのようなシステムがもっともっと多く作られ、人材が多く派遣され、子どもたちのニーズに対応できるような支援をできる組織が数多くあることが条件だと思います。

昔は、同じ学校に長く勤めることが普通でしたが、最近は教員の異動も頻繁になってきています。同じ学校に在籍するのは最大で6年とされています。となると、部活動にも影響してきます。専門性を持った先生が少ないのが現状です。体育の教員だけがクラブの顧問をするわけではありません。他の教科の先生が指導にあたってくださるのはありがたいことではあります。課題も多いです。指導にあたっては、独学で勉強したり、現場で学ぶことも必要です。そういった意味で、これからは指導者を育てる養成所のような施設が必要になると思います。

今、日本で潤沢な資金を持っているのはサッカー界でしょう。とすれば、Jリーグの在り方、指導者育成の在り方とノウハウを私たちが学ぶ必要がありますね。

特に教師はお願いすることが苦手です。プライドが高いですから、なかなか、そういったところへ頭を下げてまで勉強しには行きません。自分が好きなことをやるためには、ときには、プライドを捨てて、そういったところで学ぶんだという意識の改革が求められます。子どもたちのために、そういった指導者が一人でも多く出てくることを願っています。

田中氏

3人のパネラーの方々から、活動内容をご紹介いただきました。後半は、それらを受けて、質問やご意見を出していただきたいと思います。お手元に配布しました用紙にご記入いただいて、私の方から皆さんにご紹介する形にします。

ところで、私は、冒頭で自分の紹介もせずに失礼をしました。なぜ、渋谷区教育委員会の人間がここにいるのかと疑問に思われる方もいらっしゃると思います。実は、私は10年ほど前に荻窪1丁目に引っ越してきました。渋谷区では、「子どもは地域の宝」ということで、さまざまな施策を打ち出しています。

それでは、3人の方のお話をもとに「未来像」ということで、大きく二つの話題に絞って話を進めたいと思います。一つは学校の部活動に対して、どのように地域の支援を進めていくべきか。もう一つは、早稲田クラブの活動紹介にもあったように、スポーツ界の支援などを中心に、後半を進めたいと思います。

では、ディスカッションに入る前に、いくつかご質問が来ていますので、そちらから読み上げます。まず、後藤さんの早稲田クラブに関して、活動されている場所とか資金面について、もう少し詳細に聞きたいというご質問があります。

後藤氏

早稲田クラブが立ち上がったのが、この9月でして、現在活動をしているのはラグビーのみです。上井草にあります早大のグラウンドで、毎週日曜日にラグビースクールを開催しています。来年の4月からは、東伏見でサッカースクール、戸田市でボートスクール、西早稲田のキャンパスでフェンシング教室の開催を予定しております。

こうした活動の資金源ですが、主に三つあります。一つ目はスポンサーが現在8社ありまして、1社あたり500万円で話を進めています。初年度は約4000万円という計算になります。これ以外に、サポーターズクラブ会員から年一人5千円を集めています。もうひとつ、純粹の収益事業にも取り組んで収益の規模を大きくしてゆきたいと考えています。当面は早稲田クラブのオリジナル商品などを販売する物販事業などです。その他として、もちろん、スクール開催に関しても費用をいただいて、指導者の人件費や活動経費を捻出します。とは言いましても、スポーツ教室としてあまり高額を求めることには抵抗がありますし、スポーツ種目によっても相場があると思います。具体的には、ラグビースクールは月1500円いただいています。サッカースクールなどは月5000円程度いただいても、結構生徒が集まってくると予想しています。これくらいの規模で生徒を100人集めることができれば、一人か二人の専任のサッカーディビジョンを確保することができると思います。

また、指導者に関しては、現在、早稲田のOBを中心に各ディビジョンのスタッフを確保しています。ただ、スクール内だけなら、こういった体制でよい

のですが、地域の学校などへの出張も含めると、より多くの指導者を確保しなければならなくなります。そうなったときに、早稲田クラブだけで人材を抱えるのは限界があると思いますので、早稲田クラブとしては、スポーツ指導者の指導、育成が急務だと考えています。

田中氏

はい、ありがとうございました。お話を聞いた限りでは、有給のスタッフの方というのは、現在は数人と考えてよいのでしょうか？

後藤氏：そうです。

参加者：スクールの対象は？

後藤氏：ラグビースクールの場合は、幼稚園児から中学生までが対象です。

参加者：幼稚園児から中学生というのは、年齢的には？

後藤氏：4歳から15歳までとなります。

参加者：すべての年齢の子どもが一緒にやるのですか？

後藤氏

幼稚園児、小学校1・2年生、小学校3・4年生、小学校5・6年生、中学生という五つのカテゴリーに分けて指導します。

参加者：さきほど2名くらいの指導者で対応するとおっしゃったと思いますが...

後藤氏

さきほど言いましたの、チーフ・コーチのことでして、それぞれに7、8人のスタッドコーチがつきます。スタッドコーチは、父兄の方などをお願いします。そうして、子ども二人に一人の大人がつくような体制にしています。

田中氏

10年といった、非常に長いビジョンでスポーツ環境を変革してゆかれようとしている早稲田クラブさんですが、早稲田大学からの協力は？

後藤氏

4点ほどあります。大学の自治会をお願いして、初期投資として3000万円ほど融資していただきました。これは借り入れたものなので返却していかなければなりません。2点目として、早稲田という名前を使うことを許可してもらいました。3番目には大学が保有するスポーツ施設の利用、4番目として、NPO法人の理事に早稲田大学のスポーツ関係者の方に就任していただきました。ちなみに理事長は現総長の白井克彦さんです。

田中氏

次は、井村さんのお話に対する質問です。学校での指導方法の問題、指導料の問題、あるいは参加する子どもたちの条件などをご質問されています。

井村氏

先ほど紹介したミニバスケットチームは世田谷区の小学校にあります。拠点

校以外からの参加は可能か？ というご質問ですが、そのこの学校に通う子どもたちだけに限定しています。しかし、中学生、高校生、お父さん、お母さんに関してましては、その学校の卒業生や在校生の保護者でなければならないという制約はありません。その会の活動内容を理解して、子どもたちを支援しながら自分たちも楽しみたいという方なら参加できます。ほとんど口コミですが、そういった形で、活動のすそ野を広げています。

なぜ、小学生はその学校の生徒に限っているかといいますと、「学校との関係はどうなっているか？」という、次の質問にも関係しています。基本的には、世田谷区は杉並区に比べて、より学校施設を開放しようということで、(ケヤキネットというコンピュータで管理しておりますが)、学校の校庭でも体育館でも、一般の区民の方が広く利用できるようにしています。そして、午後6時30分までが学校の管轄時間内で、午後6時30分以降、午後9時までは区が管理して一般に開放する形にしています。また土曜日・日曜日も同様です。しかし、学校施設の利用に関しては、学校行事が一番優先されます。そして、次の優先事項は、学校が認めたクラブ活動で、後にPTAの行事などが続きます。それらを押さえた上で、空いているところを一般区民に開放する形になります。やはり自分の学校の生徒が参加しているということで、施設の利用も優先されるということですので、こういった条件をつけているわけです。

また、最近、少子化の影響で、1校だけでは人数が足りず、隣の学校と合同でクラブを運営しているといった例もあります。これはこれでいろいろよい面もありますが、試合の際などには面倒なこともあります。そういったことに関しては、長谷川先生の方からお話をいただければよいかと思えます。

また、先生の人事異動によってクラブの維持が難しいという現状の話になりますが、実際に杉並区でも、そういった例がみられます。先生方も、授業を終えた後で、さらに生徒たちの面倒をみる時間的・精神的な余裕がないということもあります。保護者や地域の方々が支援し、いろいろ工夫をしてゆかないと子どもたちの活動の場が広がらないと思えます。

長谷川氏

複数校合同でのクラブ活動の可能性は？ というご質問は、私の方からお答えしたいと思います。現在、杉並区では、複数校での取り組みを認めています。また、複数校でのクラブで試合に出場することは、杉並区の大会では認めています。しかし、都の大会には合同チームは出場できません。また、かつては、教員が引率しないと試合に出られませんでした。現在は登録制にしております。都の中学校体育連盟には、バスケットのAさんをコーチとして中学校が雇いました、という届出をすれば、試合への出場が可能になりました。ただ、全国の大会に出場するには、顧問の先生がいないと無理なようです。

先ほども述べましたように、小学校でスポーツクラブの維持ができなくなったのは、男子、女子ともに、若い先生が減ったことが大きな要因です。それだけでなくとも狭き門なのに、特に男子学生はあまり勉強をしないのでしょ

か・・・？女性はコツコツと勉強されるので、小学校の先生には女性が多いのです。女性の先生ではスポーツ指導はダメだといっているのではなく、もっと男性にも頑張ってもらいたいのです。

部活動指導においては、子どもに与える影響が非常に大きいものがあります。ですから、地域の方々も含めて、これから指導にあたる方々の質の向上が望めます。

どういう目的で監督になっておられるのか、あるいはコーチをしておられるのか。あるいはどういうチームをつくっていきたいのか、そういったことが非常に重要です。ほとんど無償ボランティアでやっておられる方が多いと思います。

特に、プロ指向になっているサッカーとか野球、ゴルフといった種目の指導においては問題が発生しやすいのです。私たちが困るのは、クラブチームに入っていて、その監督の推薦というものが大きな意味を持ち始めていることです。反比例的に、私たち学校の教師の発言力は弱まっています。人をめぐるトラブルが多発しているのが現状です。どこで、そういった問題を抑制するのか。やはり、なぜその人が監督なりコーチなりをなさっているのか、原点のポリシーと言いますか、そこに関係してくる問題ではないかと考えます。また、指導者養成所といったものも必要です。

やはり、区が責任を持って、講習会のような、技術はもちろん人間性を磨くシステムをつくる必要があります。

田中氏

「合同チーム」の話が出ましたが、合同で練習などを行う場合の問題点にはどのようなものがありますか？

長谷川氏

例えば、A校とB校が合同で練習していたときに事故（ケガ）が起きた場合、責任はA校側にあるのか、B校側にあるのか、揉めることがよくあります。そこで、私どもとしては、合同で練習されるのは結構ですが、必ず保険をかけて下さいと言っています。今後は、少子化もあり、合同チームは増えていくと思いますので、いろいろ検討しなければならないことも多々あると思います。

ところで、杉並区の大会で合同チームの出場が認められるようになったのは、区の教育委員会から中学校の校長会のメンバーを派遣して欲しいという要請があったことがきっかけです。2回目の時に私が派遣されました。その頃から、地域のボランティアも含めてスポーツ指導者の間で決まってきたことです。

今後の課題は、地域の住民の方の支援もありますが、もっと企業の支援が欲しいということです。ただ、現在は不景気を反映して、企業内のスポーツ部がどんどん廃部されているような現状ですね。早く景気回復して、企業から支援をいただいて、子どもたちが伸び伸びとスポーツを行えるシステムが確立され

ることが望まれます。

田中氏

以上で、ご質問いただいた内容に関しては、各パネラーの皆さんにお答えいただきましたが、もっと聞いておきたいことはございませんか？

特にないようでしたら、後残り20分ほどになりましたので、まとめに入りたいと思います。

“未来像”というテーマが重くのしかかっていますので、将来に向けた姿について話が進められたらよいと思います。その一つ目として、これまでも、これからも中学校では、部活動というものの位置づけが大きいと思います。そして、ますます地域のサポートが重要になってくると思われそうですが、そうなりますと、またいろいろと課題が出てまいります。たとえば、学校側が外部指導者を受け入れてくれないといったことも耳にします。そこで、パネラーの皆さんに、部活動を活潑にしていく上での地域支援について、ご意見をお聞きしたいと思います。

井村氏

まず、部活動においては、中学校の側がリーダーシップをとってくれることが一番だと思います。たとえば、杉並区の場合でも、16の同好会のミニバスケットボールのチームがあります。そして、それぞれのチームにボランティアでコーチをされておられる方が何十人といらっしゃいます。しかし、小学校でコーチをされてきた方たちが、指導した子どもたちが中学生になったので、今度は中学校でもコーチをしようと申し入れても、学校側が拒否することところもあるのです。

「コーチはいます、中学校に関係ない人は学校に入ってきてほしくない」と。そういう現状を打破することが先決です。そして、小学校で指導をされ方も勉強されて、中学生の指導にも当たれるように質の向上を目指すといったことも必要になります。

小学生と中学生では肉体的な特徴も違いますので、指導内容も変わってきます。そういったことを体験することで、指導者のレベルも向上するのではないかと思います。そして、先生が人事異動で他校に移られても、地域の方がしっかりついていけば、部活動も支障なく運営していけると思います。

もちろん、先ほども述べましたように、小学校の場合には、保護者の方の支援が欠かせません。合宿ひとつとっても、やはり保護者の方々から参加費を集めて、保護者の方が引率することが条件となっています。

田中氏

今度は後藤さんに、早稲田クラブとしては、どのように地域の学校の部活動に関わってゆこうと考えておられるかをお尋ねしたと思います。

後藤氏

実は、現在、中野区のある中学校の先生からご相談を受けております。その先生は、現在ラグビー部の指導に当たっておられますが、在籍が長くなって、いつ転勤になってもおかしくないという時期を迎えておられます。「私がいなくなったら、この部は存続しなくなる懸念があるので、早稲田クラブに外部指導という形で支援してもらえないだろうか」ということなのです。できるだけのご支援はしたいと考えておりますが、早稲田クラブも立ち上がったばかりで、支援体制もまだ固まっていません。ただ、早稲田クラブとしては、技術能力や人間的素養といったものは、すぐにでも提供できるだけの人材が揃っています。また、将来はスポーツ指導で生活してゆきたいと考えている人もいます。これまでは、どこかの会社に入ってスポーツクラブに属して活躍するとか、あるいは学校の保健体育の先生になるなど、選択肢が限られていました。そこで、早稲田クラブでは、純粹のスポーツ指導員というとちょっと語弊があるかもしれませんが、そういった形で働ける場を確立し、そういった人々を中学校へのスポーツ指導に派遣することも、できるだけ早い段階で実現させたいと考えています。

田中氏

学校のスポーツ活動支援に対する意見も出ました。また、学校側の閉鎖性といった問題点なども指摘されました。そこで、もう少しこのところを突っ込んで議論したいと思いますが、まずは、校長のお立場から、長谷川さん、いかがですか。

長谷川氏

私が中学校の体育連盟の会長として活動する中で、早稲田クラブさんのことも耳にはしておりました。今後も、またお会いする機会が増えると思います。そこで、できるかできないか分かりませんが、ひとつお願いしたいことがあります。

学生さんに授業の中で単位を取ってもらいたいということです。たとえば、杉並区でも中野区でも、どこでも構いませんが、中学校の授業で、自分のやっているスポーツを生徒たちに指導する、それを単位として組み入れることはできませんかね。学生さんにとっても、「ああ、スポーツの指導というのは、こんなに楽しいことなんだ」という発見があると思うのです。

未来像を考えたときに、私は決して暗いとは思いません。先生の異動が多くて、学校に根付かないという意見がありました。確かに、たとえば、教師が希望すれば1年で異動することもできます。反対に、校長がその先生を認めれば、何年でもいられるという条件がつかしました。校長には、これまでそういった権限がありませんでした。ですから、たとえば、バスケットを熱心に指導している教師がいて、その教師が本業である授業に熱心に取り組んでおられるのであれば、私なら、何年でも在校してもらおうようにしますね。

そういった意味からも、質の高い教師の確保が望まれますが、私が問題だと

思うのは、新任教師の就任先の学校が決まるのが2月とか3月であるということです。これでは遅すぎます。企業ならもっと早く決まりますよね。そうしますと、先生になろうと思っていた学生が、条件のよい企業に行ってしまうではありませんか。また、だれが採用するのかといいますと、採用は東京都教育委員会です。1年間の試用期間がありますので、1年後に、その人が教師に向いているかどうかは、校長が判断することなのです。向いていないと思ったら、他の職場を勧めるべきなのかも知れませんね。人を見る目を養わなければならないと思います。

私の好きな言葉に「勇気・創造・決断・未来」というのがあります。校長は勇気を持たなくてはなりません。そして、果敢に決断すべきです。それは何のためか、子どものためなのです。教育とは創造です。そして未来の子どもたちがどのような学校教育を受けられるのか、まさに、未来ですね。

話がまとまりませんが、いずれにしましても、私も本来は保健体育の教師ですから、多くの優れたスポーツ指導員が育ってくれることを心から願っています。

田中氏

では、ちょっと視点を変えまして、早稲田クラブさんの活動に見るような、「総合型地域スポーツクラブ」の可能性に関して、パネラーの皆さんからコメントをいただきたいと思います。では、後藤さんからお願いします。

後藤氏

まず、小学校から中学校へというように、一貫したスポーツ指導体制というものがあると思います。あるいは、部員が少ないので学校を超えて合同チームをつくる動きもありますが、子どもたちの実態を見ていますと、学校への帰属意識が非常に高いと感じます。高校野球の甲子園大会などは、その典型ですね。そこで、重要になるのが学校でのスポーツ指導と地域におけるスポーツ指導の連携です。学校単位のチームに属しながらも、一方で値域との連携による一貫指導体制が確立されていくのが望ましいのではないかと考えます。

井村氏

社会は、大家族型から核家族型へと移行してきましたが、スポーツにおいても、学校単位とかクラブ単位とか、小さな集まりで頑張っているというのが、私の現状に対する認識です。そこで、この小さな集まりは尊重しつつ、一方で、それを大家族型にしてゆくことを総合型への移行というイメージでとらえます。たとえば、ここに隣合ったA校、B校があったとしますと、試合のときに顔を合わせることはあっても、横のつながりが希薄です。情報交換をすることで、合同で勉強会や講習会を開くとか、そういった機会を増やすことで横のつながりを創ってゆくことが望まれます。それと、小学校と中学校というように、タテの関係も創ってゆく必要があります。このように、身近なヨコとタテ

の関係を創ってゆくことが、総合型のベースになるのではないかと考えます。それが大きなピラミッドにつながってゆくのが日本的でよいのではないかと、個人的には思います。

田中氏

最後に、長谷川先生は、学校側から見て、「総合型地域スポーツクラブ」というものをどのように考えておられますか。

長谷川氏

ずっと学校におりましたので、正直なところ、これまでは総合型のスポーツクラブというものは考えたことがありませんでした。いま小学校から中学校へ進むとき、子どもが行きたいと望む学校を自由に選べるようになってきました。そして、「あそこの学校はバスケットチームが強いから選ぶ」、そういった動きが現実に出ています。「自分はその学校へ行っ、これをやるんだ」ということが可能な時代になってきたのです。

もうひとつ、学校では、教師の評価が行われるようになってきました。生徒にやらせています。保護者の皆さんや学校評議員の方にもお願いしています。先生たちには、学力を高める、興味・意欲を高める、子どもに自信をつけさせる、子どもを変容させる、そういった力をつけてくださいとお願いしています。それに対する評価です。そのように、子どもや保護者のニーズに応えられる教員を残そうと努力しています。子どもを学校に人質に取られているという意識もまだ残っていますが、今や、このような評価制度などにより、保護者が学校や教師にモノを言える時代になっているわけです。

子どもたちにとっては学校の存在は大きなものがあります。学校の中に自分の居る場所がある、未来を語る場所がある、自分の力を発揮できる場所がある、それが子どもにとって一番よい学校である、と私は考えています。私たちも、そういう学校にする努力をしていかなければならないと考えていますが、保護者の方々も自由に意見や希望を述べることで、それが実現できるようになってきたと思います。

田中氏

学校にも変革の時代が訪れているようですね。ゆっくり時間がとれませんでした。部活動に対する地域支援を積極的に進めましょうということでは、意見の一致をみたと言えるのではないのでしょうか。部活動の運営面でも、地域、あるいは保護者の方が関わることで、先生が異動されても部の存続が可能になるといった意見も聞かれました。また、早稲田クラブのようなNPOの力を借りることも大切であることが分かりました。早速明日から取り組めることもあれば、長い目で考えていくべき課題も出ました。今日の成果を青少年スポーツ指導に関する活動につなげていっていただければ幸いです。